Osaka University Knowledge Archive

Title	吐魯番出土文物研究会会報　第56号 ： 特集・吐魯番の歴史と文化Ⅴ
Author(s)	
Citation	吐魯番出土文物研究会会報. 1991, 56, p. 1-6
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/78867
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

吐魯番出土文物研究会会報　第５６号
１９９１年３月１日
吐魯番出土文物研究会
特集・吐魯番の歴史と文化Ｖ

〈翻　訳〉

吐魯番の歴史と文化（Ｖ）

榮　新　江　著
青木　茂・關尾史郎訳注

【第二節　高昌国の時期（紀元四六〇～六四〇年・承前）】

◆胡天と薩薄

高昌はシルクロード上の重要な都市だったので、東西の様々な文化の交流の道筋に当たっていたのみならず、北方の遊牧民族が南下する際の要路でもあった。そのため、この地の民族構成はまことに複雑であった。高昌国の時代には、少なくとも中原や河西出身の漢族の大姓、漢魏の時代に中原から謫発されて来た戍卒の子孫、土着の車師人、および中央アジアより交易のためこの地にやって来て定住してしまったソグド人などから成り立っていた(1)。多数の民族が集住していた結果、この地では文化も特色ある様相を呈し、中原から伝来した漢文化やインドに起源をもつ仏教文化以外にも、西アジアや中央アジアで盛行していたゾロアスター教（中国では祆教と称する）も早くから吐魯番地域に伝えられていた。

祆教はソグド人商人によって東伝されたと考えられる(2)。ソグド人の故地は中央アジアのアム・ダリアとシル・ダリアの間のザラフシャン川流域であり、この一帯にはサマルカンド（現在のマラカンダ）を中心として、ソグド語を母語とする民族の建てた大小一〇余りの都市国家があった。このうち早くから中国と交流があった国は、康国、安国、曹国、石国、米国、何国、史国など昭武九姓の国として中国の史書にもその名が見えている(3)。ソグド人は商業に優れていたということで有名であるが、利のある所遠くとも至らざるはなく、長期にわたってシルクロード上において中継貿易に従事し、その足跡はあまねくヨーロッパとアジアの内陸部に及んでいた(4)。中国にやって来たソグド人商人たちはみな本国の国名をもってその姓とした。彼らのなかには中国に残留する者もおり、当地の住民となっていた。吐魯番出土文書からも、少なからぬ曹姓や康姓のソグド人がこの地に居住していたことを窺い知ることができる(5)。

しかしシルクロードを舞台に活躍していたソグド人商人は貿易に貢献したばかりでなく、彼らが信仰していた祆教のような伝統的な宗教を東方に伝える役割も果たした。一九六五年に安楽城で出土した『金光明經』の題記(6)には、「庚午歳四月十三日、於高昌城東胡天南太后祠下、為索將軍保子妻息合家、寫此金光明一部。斷手記竟」とあった。庚午歳はおそらく西暦の四三〇年であり、胡天とはゾロアスター神を指していると考えられる(7)。これによって既に高昌郡時代に祆教が吐魯番盆地に入っていたことがわかる。高昌国時代になっても、胡天はその他の在天の神々とともになお祀られていた(8)。祆教の主な信者は中央アジアからやって来たソグド人商人であると思われる。ただ高昌国の官制には薩薄なる官職があり(9)、伝統的な漢魏時代の官制とは異なっており、むしろ北斉や隋・唐などの官制中に見えている祆教の事務を担当する薩甫、薩保、および薩宝などの音に近似している(10)。これはトルコ語の Sartpauか、あるいは中古ペルシャ語のŠaθ-pāvか、はたまたシリア語のSābāを来源としているのであろう(11)。これにより高昌国においても祆教の事務を管掌する官員が設けられていたことがわかるが、このことはまた、この地にも祆教の信者が決して少なくなかったことを物語っている。たしかに高昌国にあっては、祆教は仏教ほどには広範に普及しなかったけれども、この多民族国家の多様な文化の構成要素のひとつとなっていたのである(12)。

◆突厥と鉄勒

伝統的な漢文化や仏教、および祆教などが高昌国において流布していた状況を理解すると同時に、北方の遊牧民族の影響力も忘れてはならない。

高昌郡の末期と高昌国の初期には、吐魯番盆地は柔然と高車の二大遊牧勢力の争奪と支配の対象となった。この時期には王朝が目まぐるしく交代し、戦乱が頻発した。麴氏高昌国が建てられてからは、一旦は高車の支配を受けたが、高車は柔然と争いを繰り返し、最後は双方とも敗れ傷つき、衰退していった。麴氏高昌国の初期の王たちは儒学を尊重して[13]、尊王攘夷思想を鼓舞したが、これはこの時期に状況に適合していた。高車が五四一年に北魏に降伏すると、柔然に取って代わって北方の雄となったのは、新興の突厥であった。

突厥はアルタイ山に起こり、最初は柔然に臣従してその鍛奴の地位にあった。五五二年、突厥の首領土門は独立し、一挙に柔然を撃破した。その子の木杆可汗が柔然を徹底的に撃滅した[14]。その後、「西は嚈噠を破り、東は契丹を走らせ、北は契骨を并せ、塞外の諸国を威服し」[15]て、北方の遊牧民族の覇者となった。ほどなくすると突厥は吐魯番盆地に拠っていた高昌国にも侵入を開始した。高昌王麴寶茂は新興県令の麴斌に軍を率いて反撃させ、突厥の領内に攻め入らせた。しかし高昌国の兵力はしょせん突厥の相手であろうはずもなく、一戦を交えただけでたちどころにして退却せざるをえなかった。国家維持のため、高昌王麴寶茂は状況を的確に判断して政策を変更し、麴斌を使者として突厥の可汗庭に派遣した。そこで突厥と和約を結び、婚姻の約束をなして、王の麴寶茂は突厥可汗の女を娶り、高昌国は突厥可汗国の従属国となった[16]。麴寶茂以降の歴代の高昌王はいずれも中原王朝から授与された官称号のほかに、長大な突厥の官号を併称したのである。例えば、「高昌新興令麴斌芝造寺施入記」[17]の中に見えている麴寶茂の官称号は、「使持節・驃騎大將軍・開府儀同三司・都督瓜州諸軍事・侍中・瓜州刺史・西平郡開國公・希瑩・時多浮跌・无亥・希利發・高昌王」であり、このうちでトルコ語の部分は「irkin šadpīt baγa iltäbir」[18]と復元できる。また例えばスタインの収集品のなかの『大品經』[19]の題記中にある麴乾固の称号は、「使持節・大將軍・大都督瓜州諸軍事・瓜州刺史・西平郡開國公・希近・時多浮・跋弥磑・伊離地・都蘆悌・陁豆・阿跛・摩亥・希利發・高昌王」であり、このうちトルコ語の部分は「irkin šadpīt bolmis ildi? turdi? tar-duš apa baγa iltäbir」と復元できる。このことは突厥が高昌国の宗主国となり、高昌国は毎年突厥の可汗庭に入貢しなければならなかったことを表わしている。突厥の勢力が高昌国を支配下においたので、王国内の風俗や習慣のなかには、これにともなって変化したものもあった。麴伯雅が即位した当初、突厥は彼に対し突厥の習俗に従ってその継母である突厥可汗の女を妻とするように迫った。麴伯雅はしばらくその命令には従わなかったが、最終的には屈服せざるをえなかった。このように国王でさえ突厥の風俗に従わざるをえなかったのであるから、民間については推して知るべしである。

七世紀初頭、突厥の高昌国に対する支配に動揺が生じた。六〇五年、西突厥の處羅可汗が父の仇を討つため、鉄勒諸部の酋長数百人を坑殺することを計画したのである。そこで鉄勒諸部は反抗に立ち上がって處羅可汗を大いに破り、俟利発俟斤の契弊歌楞を擁立して易勿眞莫何可汗とした。彼は貪汗山に居り、伊吾、高昌、および焉耆などはみな彼に帰属した。鉄勒は高昌国にその大臣を派遣して駐屯させ、商税を取り立てた。吐魯番出土文書のなかにも、鉄勒諸部の使臣を招待した一連の記録が残っている[20]。まさに高昌国に対する新旧の支配者が交代したその際、麴伯雅はその機会に乗じて中原に赴いて隋の煬帝に謁見した。煬帝もまた宇文氏出身の女性を華容公主に封じて彼に嫁がせた。麴伯雅は国に戻ると、漢化政策を大いに推進して、「被髪左衽」など突厥の習俗を取り除いてしまった。しかしこれによって国内の動乱が引き起こされ、麴伯雅は政変によって首都から逃げ出さざるをえなかった[21]。六年後、ようやく大族張氏の援助のもとに高昌に戻って王の地位に復帰することができたのである[22]。これと同じ頃、西突厥可汗国も復興し、六一九年には射匱可汗が鉄勒を退走させ、再度高昌国を支配下におさめた。新たに即位した高昌王麴文泰はまた西突厥の可汗と君臣・父子関係を確立することになった。一方唐朝が建立されると、麴文泰はこれとも密接な関係を保持し、絶えず使者を派遣して方物を献じた。しかし貞観以後、唐朝の勢力が西方に向かって発展を始め、高昌国を威嚇するようになると、麴文泰は西突厥と連合関係を緊密にして、唐朝と敵対することになるの

である[23]。

◆高昌国の滅亡

長安（現在の西安）に都をおいた唐朝は、その創成期に隋末の全国的な混乱以来各地に割拠していた群雄に対処することと、国内の様々な制度を整備することに主力を注いでいたので、西方を顧みるだけの余裕はなかった。しかし太宗の貞観初年には政局もようやく安定してきて、中原地区もついに唐朝のもとに統一された。そして貞観四（六三〇）年二月には、北方における最大の脅威である東突厥可汗国を一挙に撃滅した。同年九月、元来東突厥に服属していた伊吾の七城も、首領である昭武九姓胡の石萬年に率いられて臣を称して内属して来た。唐朝は早速この地に西伊州を設け、伊吾、柔遠、および納職の三県をこれに統轄させた[24]。伊吾の唐への内属は西域諸国に影響を与えた。同年十二月、高昌王の麹文泰自ら長安に朝貢し、その他の西域諸国の王たちも多くは麹文泰に続いて遣使して入朝せんとした。しかし当時朝廷で代表的な諫臣だった魏徴と、西域経営の任にあった涼州都督の李大亮がともに西域の直接支配に反対したので[25]、その影響は一定の範囲内に限定されざるをえなかった。新設された西伊州さえも、名称の上では羈縻支配に属するものであった。

貞観六（六三二）年になると、唐朝は西伊州を伊州と改め、これを完全に内地の州県と同じくした。このことは唐朝が西方に向かって進出せんとする意図を十分に表わしている。唐朝は伊州をその足掛りとしたが、最初にその脅威を感じたのは、唐朝の西辺に接していた吐魯番盆地の麹氏高昌国であった。高昌王麹文泰は貞観四年に入朝して太宗に謁見していたが、帰国後はまた西突厥の葉護と連合して東の伊吾を攻め、この唐朝の西域進出の門戸を閉ざそうとした。また西方では唐朝と友好的な関係にあった焉耆の五城を攻め落して男女一五〇〇人程を連行し、家屋に火を放って退いた。さらに唐朝に入貢せんとした西域諸国の使者を劫略した。そこで太宗はこれを口実に、貞観十三（六三九）年十二月、吏部尚書の侯君集を交河道行軍大総管とし、彼に薛萬備、薛孤呉兒、牛進達、および姜行本らの将軍を指揮して兵を率いて高昌国に進攻させたのである[26]。

高昌王麹文泰は可汗浮図城に駐屯していた西突厥の欲谷設と語らい[27]、緊急事態には互いに助け合って表裏一体になることを取り決めた。彼らは妖鬼もたじろぐ自然の要害によって頑強に抵抗しようと図ったが、唐軍は伊吾からいくつかのルートを使って前進して来た。なかでも姜行本は伊吾から天山へと北上し、森林を伐採して攻城用の梯子を造り、さらにここに「紀功碑」を立てて唐朝のこのたびの高昌遠征の壮挙を記録した[28]。別の一隊は赤谷を通って天山を越え、可汗浮図城を攻めた。西突厥の守将欲谷設は風をくらって逃亡し、葉護は唐朝に投降してしまった。高昌国は西突厥の援護を失うことになったのである。唐軍の主力部隊が磧口に到達したと聞いた麹文泰は恐れおののき、万策尽きて病を発して亡くなった。そしてその子の麹智盛が立った。唐軍は柳谷より下って先ず田地郡城を陥れ[29]、次いで高昌城に迫った。貞観十四（六四〇）年の八月八日、麹智盛は城門を開いて唐軍に降伏し、麹氏高昌国は一〇代一三九年でここに滅びたのであった。

【訳　註】

（１）　高昌国の民族構成について論じた最近の成果としては、郭平梁「魏晋南北朝時期高昌地区的民族及其相互関係」（中国民族史学会編『中国民族関係史研究』西寧　青海人民出版社、一九八八年、所収）、杜斗城・鄭炳林「高昌王国的民族和人口結構」（『西北民族研究』一九八八年第一期）などがある。

（２）　この問題に関しては、先駆的な研究である陳垣「火祆教入中国考」（『陳垣学術論文集』第一集、北京　中華書局、一九八〇年、所収）、羽田亨「天と祆と祁連と」（『羽田博士史学論文集』下巻〈言語・宗教篇〉、京都　東洋史研究会、一九五八年、所収）、参照。

（３）　昭武九姓については、さしあたり古典的だが、白鳥庫吉「粟特国考」（『白鳥庫吉全集』第七巻〈西域史研究・下〉、東京　岩波書店、一九七一年、所収）、参照。またソグド人に関する諸研究は、岡本孝「ソグド王統攷－オ＝イ＝スミルノア説批判を中心として－」（『東洋学報』第六五巻第三・四号、一九八四年）の註（４）、（５）、参照。

（４）　この問題に関する包括的な理解は、羽田明「ソグド人の東方活動」（同氏『中央アジア史研

究』京都　臨川書店、一九八二年、所収）、護雅夫『古代遊牧帝国』（東京　中央公論社・中公新書437、一九七六年）などによって得ることができよう。

（５）　姜伯勤・池田温訳「敦煌・吐魯番とシルクロード上のソグド人」（『季刊東西交渉』第五巻第一、二、三号、一九八六年）、参照。なおこの論稿は、荒川正晴「トゥルファン出土「麹氏高昌国時代ソグド文女奴隷売買文書」の理解をめぐって」（『外国学研究』〈神戸市外国語大学外国学研究所〉第二一号、一九九〇年）とともに、以下この項全般にわたって参照されるべきものである。

（６）　〈写〉『中国文物』一二二　〈録〉『識語集録』、八五頁七五。著者の釈読は『識語集録』のそれと一部異なるが、ここでは『識語集録』に従う。

（７）　註（２）に上げた陳、羽田両氏の論稿以降、「胡天」は著者がいうようにゾロアスター教のことと考えられてきたが、近年「正史」西域伝の「天神」を天体に対する自然崇拝とする林悟殊氏（「論高昌“俗事天神”」〈『歴史研究』一九八七年第四期〉）や、道教信仰の所産とする陳国燦氏（「従葬儀看道教“天神”観在高昌国的流行」〈『魏晋南北朝隋唐史資料』第九・一〇期、一九八八年〉）などの見解が相次いで出された。しかしやはり王素氏（「高昌火祆教論稿」〈『歴史研究』一九八六年第三期〉、「也論高昌“俗事天神”」〈『歴史研究』一九八八年第三期〉）のように、「天神」もゾロアスター教と結び付けて考えるべきであろう。

（８）　その根拠は「章和五（五三五）年取牛羊供祀帳」（73TAM524:34(a)　〈写〉『文書』Ⅱ、図一　〈録〉同、三九頁）と思われるが、この文書の詳細については、關尾「「章和五（５３５）年取牛羊供祀帳」の正体－『吐魯番出土文書』劄記（七）－」（『史信』〈新潟大学關尾ゼミ〉第二、三、一〇、一六号、一九八八～九〇年）、参照。

（９）　その根拠は「永平二（五五〇）年十二月卅日祀部班示爲知祀人名及謫罰事」（73TAM504:32/2-2　〈録〉『文書』Ⅱ、四五頁以下）や、「義和六（六一九）九月□伯延等傳付麥・粟・床條」(60TAM331:12/1～12/8　〈録〉『文書』Ⅲ、一一〇頁以下）などである。このうち前者については、その性格に限定してだが、關尾「【覚書】「班示」という様式の高昌文書について」（本誌第四四号、一九九〇年）で言及した。

(10)　薩甫以下の官については、陳、前掲「火祆教入中国考」、参照。

(11)　薩薄や、中国王朝の薩甫以下の官名の語源については、吉田豊「ソグド語雑録」(Ⅱ)（『オリエント』第三一巻第二号、一九八九年）、参照。諸言語への転写についても、この論稿における吉田氏の整理に従って原文をあらためた。

(12)　高昌国における仏教とゾロアスター教の普及という問題は、王素氏が明かにしたように（同氏、前掲「高昌火祆教論稿」、「高昌仏祠向仏寺的演変－吐魯番文書札記（二）－」〈『学林漫録』第一一集、一九八五年〉）、時代的な差も考慮する必要があろう。

(13)　薛宗正「以儒学為主体的高昌漢文化」（『新疆文物』一九八九年第一期）は、この問題に関する最新の成果だが、むしろ大谷勝真「高昌国に於ける儒学」（『服部先生古稀祝賀記念論文集』東京　冨山房、一九三六年）、参照。

(14)　突厥の自立と発展については、松田壽男「突厥勃興史論」、「鉄工としての突厥族の発展」（以上、『松田壽男著作集』第二巻〈遊牧民の歴史〉、東京　六興出版、一九八六年、所収)、『古代天山の歴史地理学的研究』（東京　早稲田大学出版部、一九五六年〈増補版：一九七〇年〉）第三部第一攷、参照。なお原文は突厥の独立（五五二年）を五二二年とするが、これは単純な印刷ミスであろう。

(15)　『周書』巻五〇異域下突厥傳。

(16)　対突厥政策における麹斌の事跡については、關尾「高昌国における田土をめぐる覚書－『吐魯番出土文書』劄記（三）－」（『中国水利史研究』第一四号、一九八四年）、馬雍「突厥与高昌麹氏王朝始建交考」（同氏『西域史地文物叢考』北京　文物出版社、一九九〇年、所収)、参照。またこれ以降の高昌国と突厥との関係については、姜伯勤「高昌麹氏与東西突厥－吐魯

番所出客館文書研究－」（北京大学中国中古史研究中心編『敦煌吐魯番文献研究論集』第五輯、北京　北京大学出版社、一九九〇年）に詳しい。

(17)　〈録〉「高昌三碑」、一一〇頁以下。句読は著者に従ったが、釈読は「高昌三碑」によって一部あらためた。

(18)　以下、トルコ語の表記については、本会会員の片山章雄氏のご教示によって、著者の表記を一部あらためた。またこれら突厥の官称号については、護雅夫『古代トルコ民族史研究』Ⅰ（東京　山川出版社、一九六七年）第二編第三章、参照。

(19)　BL OR8212-660(M405)-Toy.042(a)　〈写〉D.C., XXXIV 〈録〉ibid.,p.177 『識語集録』、一五二頁。　著者は経典名を『大般若經』とするが、題記の冒頭に「大品經巻第十八」と明記されており、マスペロや『識語集録』に、釈読ともども従った。

(20)　具体的には、「高昌年次未詳□衆保等傳供食帳」（69TKM33:1/2(a),1/7(a),1/10(a),1/6(a) 1/3(a)　〈録〉『文書』Ⅱ、二八三頁）や、「高昌年次未詳竺佛圖等傳供食帳」(60TAM307:5/3(a),5/2(a),5/4,5/2(a)〈録〉同Ⅲ、二五〇頁以下）をはじめとする阿斯塔那三〇七号墓から出土した四点の「供食帳」（この文書の一般的な特徴については、呉玉貴「試論両件高昌供食文書」〈『中国史研究』一九九〇年第一期〉、参照）などであり、具体的な同定については、姜伯勤「高昌文書中所見的鉄勒人」（『文物』一九八六年第一二期）を参照されたい。またこのほかにも非漢民族の使者に関わる文書として、「延壽十四（六三二）年七月兵部差人看客館客使文書」（72TAM171:10 (a), 12(a)～18(a) 〈録〉同Ⅳ、一三二頁以下）があるが、これについては、姜、前掲「高昌麴氏与東西突厥」、参照。

(21)　呉震「麴氏高昌国史索隠－従張雄夫婦墓志談起－」（『文物』一九八一年第一期）は、麴伯雅の避難先を西突厥の統葉護可汗のもととしており、近年の北條祐英「西突厥の東方経略とその影響について」（『東海史学』第二五号、一九九一年）はそれを支持した上で、鉄勒の契苾部の勢力が高昌国に流入してきたことが、政変の「引き金」になったという。

(22)　呉、前掲「麴氏高昌国史索隠」、参照。

(23)　以下、高昌国と西突厥、および中国王朝との関係については、嶋崎昌「唐の高昌国征討の原因について」（同氏『隋唐時代の東トゥルキスタン研究－高昌国史研究を中心として－』（東京　東京大学出版会、一九七七年、所収）、参照。

(24)　唐朝による伊吾支配については、松田、前掲『古代天山の歴史地理学的研究』（増補版）補攷五、参照。

(25)　李大亮の羈縻支配論については、栗原益男「七、八世紀の東アジア世界」（唐代史研究会編『隋唐帝国と東アジア世界』東京　汲古書院、一九七九年）、参照。

(26)　唐朝の高昌遠征に関する一般的な問題については、長沢和俊「唐の高昌遠征について」(『史観』第一〇二冊、一九八〇年）、参照。

(27)　可汗浮図城とそこにあった欲谷設や葉護については、嶋崎昌「可汗浮図城考」（同氏、前掲『隋唐時代の東トゥルキスタン研究』、所収）、参照。

(28)　「貞觀十四（六四〇）年六月姜行本紀功碑」。録文は『金石萃編』巻四五、『八瓊室金石補正』巻三四、『新疆訪古録』巻二、および『西陲石刻録』などをはじめとして、多くの金石書に著録されている。

(29)　柳谷ついては、嶋崎昌「高昌国の柳谷について」（同氏、前掲『隋唐時代の東トゥルキスタン研究』、所収）、参照。ただし、長沢、前掲「唐の高昌遠征について」は、これをOrtang-Aghziに比定した嶋崎説に対して、Kok Yarとする。

【引用文献一覧補遺】

『中国文物』：『新中国の出土文物』北京　外文出版社、一九七二年。

『識語集録』：池田　温『中國古代寫本識語集録』東京　東京大学東洋文化研究所・東洋文化研究所叢刊第十一輯、一九九〇年。

「高昌三碑」：池田　温「高昌三碑略考」（『三上次男博士喜寿記念論文集』歴史編、東京　平　凡社、一九八五年）。

（第二節　高昌国時期　おわり）

■　「トゥルファン古写本展」参観記

－「高昌延壽四（六二七）年九月仁王般若經題記」のこと－

「現代書道二十人展」が第三五回を迎えたのを記念して併設された「トゥルファン古写本展」を東京会場と横浜会場で参観する機会があり、出品された「仁王般若經」を実見することができた。説明するまでもなく、本経は題記の冒頭に高昌国時代特有の「奏聞奉信」が捺されており、その意味でかねてより興味をもっていたものである（「奏聞奉信」については、關尾「高昌文書にみえる官印について－『吐魯番出土文書』劄記〈九〉－」〈本誌第四〇、四一、四四号、一九九〇年〉、参照）。図録には写真とともに藤枝晃氏による題記の録文と示唆に富む解説を載せるが、釈読には私見と異なる部分もあるので、ここにあらためて移録しておこう。

1　延壽四臣丁亥歳九月十一日、
2　経生令狐善歓抄、用
3　紙十九張。崇善寺
4　法師「玄貫」覆校。
　（中間六行分空白）
5 □□八月十八日。

藤枝氏の釈読との大きな相違点は、第一行目の末尾を氏が「二日」としていることである。たしかに「十」の縦画は垂直よりもやや右傾しており、しかも「一」を貫いて、「日」字にまでかかっており、氏の主張するごとく、一旦「二日」と書いた上に抹消するために引いた線、もしくは下辺の界線を引いた際に手が滑って上に延びた線と解釈することも、形態上からはあながち不可能とは言えまい。しかし「奏聞奉信」印が捺されている事実を尊重する限り、抹消説は成立の余地がない。またたしかに界線はこの箇所で書きつがれているが、界線とこの縦画はつながっておらず、その可能性も低いのではないだろうか。第二の点は、第四行目までのうち、藤枝氏が「玄貫」（ちなみに、池田温氏はこれを「玄覺」と釈読されている〈同氏、前掲『識語集録』、一八一頁〉）のみ彼自身の自署で別筆とする点である。この行はこれ以外にも、墨色と字の大きさが明らかに第三行目までとは異なっており（むしろこの点は玄貫の自署に近い）、しかも一字分上がっている。ただ肝心の書体は第三行目までと同じと考えられるので、やはり令狐善歓の手になるものと思われる。あるいは書写の時点を異にするのだろうか。第三の点は第五行目の意味についてである。これは題記とは全く別の一文で、藤枝氏はこれこそ実際に書写が終わった日付で、九月一一日（氏の二日）は玄貫が校正した日付と推測している。たしかに墨色も書体も題記（第三行目まで）とは明らかに異なっており、興味深い解釈だが、題記の第三行目までは経本文と書体と字の大きさはもとより墨色も全く同じであり、その間に長い時間的な経過（藤枝説では約二週間）を認めることは困難である。経本文を書き上げた後、続けて題記（の少なくとも第三行目まで）が書かれた可能性が高い。その点書写が開始された日付と考えたほうがよいかもしれないが、紙の利用法からすれば、それも断定には程遠いので、後考を俟ちたいと思う。

（關尾）

事務局（連絡先）　〒182 東京都調布市国領町５－19－14
荒　川　正　晴　方　　TEL　0424(81)4633
吐魯番出土文物研究会（The Research Society for Turfan Relics）